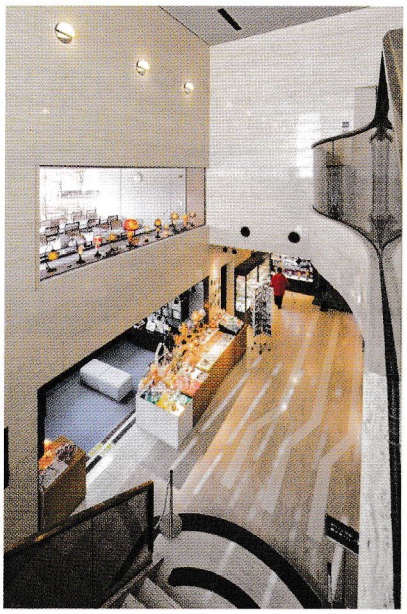
2019.1 no.82

aaca

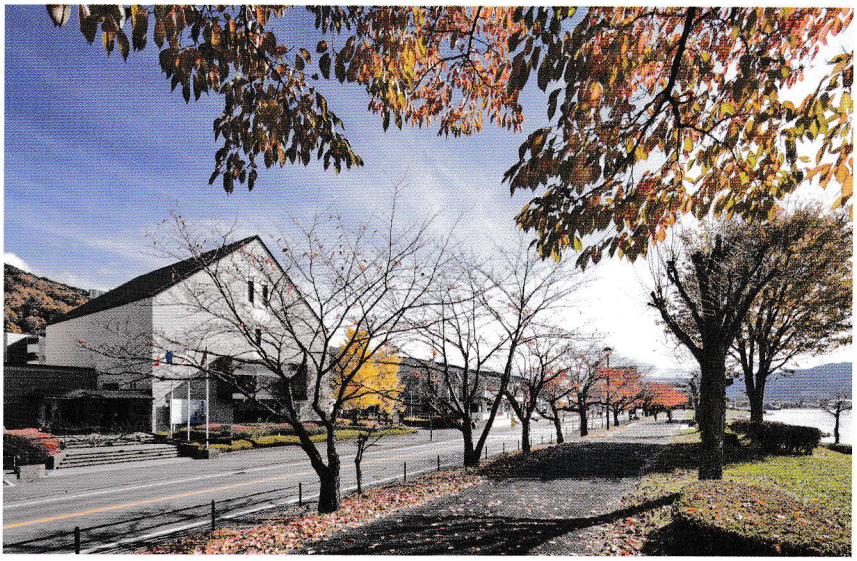
一般社団法人 日本建築美術工芸協会

設立30周年

北澤美術館（設計：芦原義信、撮影：吉田誠）



エントランスホール吹抜



外観

北澤美術館 （設計：芦原義信 1986）

表紙解説

諏訪湖の畔に建つ瀟洒な建築、その佇まいは諏訪湖畔の中でもひときわ目を引き、諏訪湖の景観のひとつとして溶け込んでいる。

北澤美術館は、エミール・ガレをはじめとしたアールヌーボーのガラス工芸の世界的にも高い評価の美術館であると共に、東山魁夷などの多くの現代日本画を所蔵する私設の美術館で、北澤利男氏の膨大な美しいコレクションを所蔵する美術館として計画された。

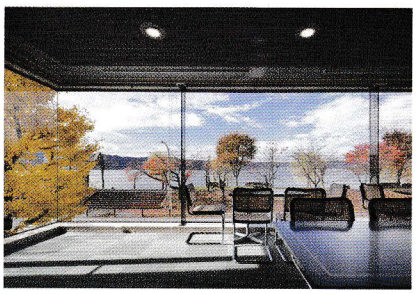
上品で控えめな切妻の三角屋根とクリーム色のタイルで覆われた穏やかな外部空間は住まいのかたちにも通じ、たおやかに内部空間を包み込む。

アールヌーボーの作品群と日本画のコレクション、これら2つの展示をどのように両立すべきか。建築家芦原義信はその解を内部空間に込めた。ガラス工芸品の展示室を1階に配し、吹抜けのエントランスホールの階段を介して、2階に日本画のための展示空間を配置した非常にシンプルな空間構成である。鑑賞者は各展示空間においてそれぞれに最適な美術鑑賞を体験することができる。そして、鑑賞の合間に立ち寄れる中二階の喫茶室、1階には休息のためのライブラリーコーナー。いずれも額のように切り取られた窓から諏訪湖畔の美しい眺めが堪能できる。交響曲の中の小休止。まるで心地よい音楽を聴いているようでもある。そう、それは各空間の“隠れた秩序”のなせる技でもある。

（文：三上紀子）

ライブラリー

展示室（1階）



喫茶室

（撮影：吉田誠）

○芦原義信 （1918-2003）建築家、工学博士、東京大学名誉教授、日本芸術院会員、aaca設立者

東京大学工学部建築学科卒業後、ハーバード大学大学院で修士号（M.Arch.）取得。昭和31年、芦原義信建築設計研究所（後に芦原建築設計研究所と改称）を設立。建築設計の傍ら、法政大学教授、武蔵野美術大学教授、東京大学教授を歴任。日本建築家協会会長、日本建築学会会長を務める。建築作品は、東京オリンピック駒沢公園体育館・管制塔（1964）、銀座ソニービル（1966）、モントリオール万国博覧会日本館（1967）、国立歴史民俗博物館（1972）、東京芸術劇場（1990）など多数。著書に『街並みの美学』（毎日出版文化賞）、『隠れた秩序－二十一世紀の都市に向って－』等。勲二等瑞宝章受章、文化勲章受章など数々の賞を受ける。

CONTENTS

■新年を迎えて

新年の挨拶　会長　岡本　賢　4

年頭にあたって

表彰委員会　可児才介　5

調査研究委員会　南三一郎　6

景観シンポジウム委員会　本　耕一　7

会員交流委員会　廣角京一　8

文化事業委員会　小谷純造　9

展覧会委員会　平山健雄　10

フォーラム委員会　立石博巳　11

広報委員会　飯田郷介　11

■芦原義信生誕 100 年を迎えて

正統なモダニズムの継承者　芦原義信　(3)　飯田郷介　12

■会員活動レポート

アーティスト・イン・レジデンスでの試みから　須齋尚子　14

日本刺繍アーチスト　品川未知子　15

芸術と建築　岡本明久　16

織物による異素材の融合と新しい出会い　深尾雅子　17

■法人会員の企業活動を訪ねる

大塚オーミ陶業株式会社を訪ねて　広報委員会　18

■景観シンポジウム

「ローカリティを魅せるしつらえ」　宮城俊作　20

景観シンポジウムに参加して　岩井　洋　21

■街なかミュゼ活動

第 5 回 街に飛び出す作品展

開催報告　安河内敦子　22

推薦選考総評　南三一郎　23

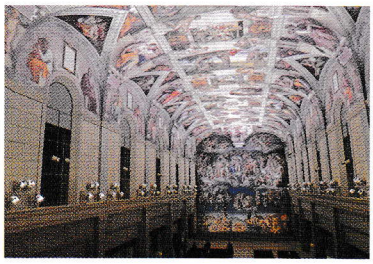
推薦作品　24

応募作品　26

■事務局だより　28

▶▶ 4

▶▶ 12



▶▶ 18

▶▶ 20

▶▶ 22

新年を迎えて

新年の挨拶

日本建築美術工芸協会
会長　岡本　賢

新年明けましておめでとうございます。

平成最後の年となり何か記念すべき感があります。

当協会の30周年記念事業が素晴らしい内容で開催されてきました。昨年12月の記念会も盛大に開催されました。会員の皆様の御努力の賜物と深く感謝申し上げます。

記念事業は、まだまだ継続していきます。更に一層の御活躍をお願い致します。

30周年の協賛金募集活動や会員増強委員会活動の状況から、当協会が各方面でその存在を認められていることが実感されたのではないかと思います。各方面で私達の活動内容を報告しますと、そんな素晴らしい活動や意義ある活動をもっと広く知らしめる様に助言される事があります。折角これだけ会員の皆様がアイデアをしぼって開催している活動が広報委員会の皆様も活発に活動していますが、会員以外にはあまり周知されていない事は残念なことだと思います。更に一般社会に向けて事業企画を展開していく事がこれからの課題の一つにあげられます。

あと1年半で東京オリンピック・パラリンピックの開催となります。これはスポーツの祭典であると同時に文化の祭典であり、教育の祭典であるとも言われます。次年度は何かオリンピック関連のトピックを取り上げて情報発信する事を大きな柱にしていきたいと思います。

2020年を起点として、更に多くのビックプロジェクトが東京や万博が開催される大阪を中心として展開していきます。これからのプロジェクトが文化的な環境の創造に少しでも関心をもってもらって文化の1%運動の実現に近づけるようにプロジェクト関連の方々に登壇してもらうシンポジウムや講演会等の企画も当協会がやらなければならない事です。

当協会の活動は全て会員のボランティアによって行われています。財政基盤が万全でない事から事務局機能が充分でないため多くの作業を会員自らの手で行って頂かなければなりません。その事が会員の皆様に多くの負担となっています。現在の会員数が350名程度の会で高額でない会費の中では、事務局の場所と最低限の人員の確保がようやくの現実です。その問題を解決する為には更に会員の増強が必要です。当協会が社会に対して重要な存在である事が認められて賛同する会員が増える事を益々期待します。

それまで私達自身で事業企画を立てる事、様々な手続き、作業を進める事をむしろ楽しんで頂いて、事業が成功した結果の達成感を味わって頂きたいと思います。

当協会の様な活動は、他の団体にはありません。その意味で誇りをもって活動して行きたいと思います。

今年も会員の皆様全員が元気で活躍して会員活動を楽しんで頂ける事を祈っています。

年頭にあたって

表彰委員会委員長　可児才介

会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

昨年もいろいろな出来事が起こり喜んだり悲しんだりの一年でしたが、今年はどうなるのでしょうか。全く先の見通しが立たなくなった時代に入ってしまったのだと感じているところです。

新年3月までのこの年度はaacaの設立30周年で多くの記念イベントが行われています。当表彰委員会においては4月と6月の2回に分けて「aaca賞受賞者紹介のつどい」を開催しました。毎年、年末の設立記念会においてこの賞の表彰式が行われており、そこでは受賞者とその作品が簡単に紹介されていました。その後会誌のaaca賞特集号での作品の紹介がありますが、作者についての紹介はなくてやや物足りない終わり方をしていました。せっかくの力作を作り上げた作者の話を聞く機会があれば面白いということから始まったイベントです。昨年は3回目の「つどい」でした。サンゲツ品川ショールームをお借りして授賞作品だけではなく、作者の顔をよく知ることができるプロフィールをお話しいただき、盛り上がりました。

二つ目の催しはaaca賞の最終審査の公開審査としたことです。例年は非公開の審査会場で率直な意見の交換を行います。ちょっと言い過ぎたり、発言の間違いに後で気が付いたり、と結構エキサイトしながら最後には興味深い結論が出るという感じで行われてきました。

11月11日に建築会館ホールで行われた今回の公開審査には、現地審査の対象となった12作品の作者全員にも集まっていただきました。最初に全ての作品の作者からのプレゼンテーションを受け、投票を行いながらの審査でした。現地の審査を担当した委員だけではなくパネルと映像だけで審査した委員からもいろいろな活発な意見がでて、全委員が納得できる結果となったようです。賞の選考に残念ながら漏れてしまった作者も含めて作者全員と選考委員などaacaの会員との交流懇親会が引き続き行われました。率直な意見交換もあって、2018年度の審査が終了しました。

三つ目は、30周年を記念して「美術工芸賞」を特別に設け、作品を選び授与したことです。従来アーティストの作品はどうしても大きな建築の作品の一部を構成するものとして一体的に表彰をされていました。今回の試みはたとえ建築の一部であっても、アートとして特に優れた作品を抽出して表彰しようというものでした。その結果、照明アーティストの高橋匡太さんの光のアートが選ばれました。

公開審査も美術工芸賞も、このような記念事業の中で初めて実現しましたが、また次の機会があれば喜ばしいことだと思います。

四つ目は、30周年を記念しての功労表彰状等を贈ったことです。この協会に対して永年にわたり顕著な貢献のあった会員や、協会の事業に協賛していただいたり、協会のイベントのために場所を提供してくださった企業の皆様に、感謝の意を籠めて、特別功労表彰状、感謝状をお贈りしました。

aaca賞はまた夏になると募集を始めます。今年も例年以上の力作がたくさん登場されるよう希望しています。また、まもなく30周年の年度は終了しますが、この一年で活躍していただいた会員の皆様の熱意や勢いを、今年も引き続き期待したいと思います。

aaca賞表彰式

aaca賞受賞者

年頭にあたって

調査研究委員会委員長　南三一郎

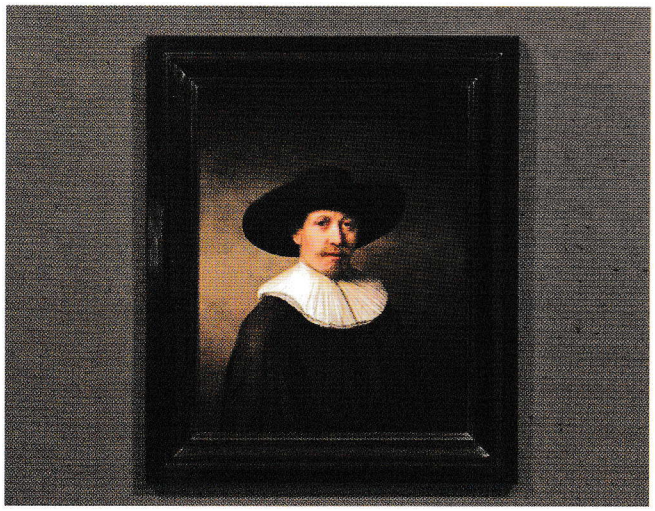
「AI」は今のところ、チェスや将棋、自動運転、判例検索などの特殊な分野のエキスパートシステムという位置づけではあるが、「AI」が近い将来、人類のルーティンな事務仕事の大半を肩代わりしてくれる時代が来ると確信している。また、ビッグデータの解析によって、人が見過ごしてきた効率性や事業の可能性を手に入れるであろう。遠い将来には、自律機動性を獲得して、他の恒星系などへの深宇宙探査や深海開発の主力になると想定されている。

「AI」時代の経済学において、人間が優位性を有する分野は、次の3分野であると経済学者が提唱している。「Creativity」、「Management」、「Hospitality」。しかしながら、「Management」は既に領域を侵食されつつある。株の売買や人事考課への導入などが知られているが、JALでは予約システムを「AI」対応としたところ大幅な効率化・黒字化が達成できたという。

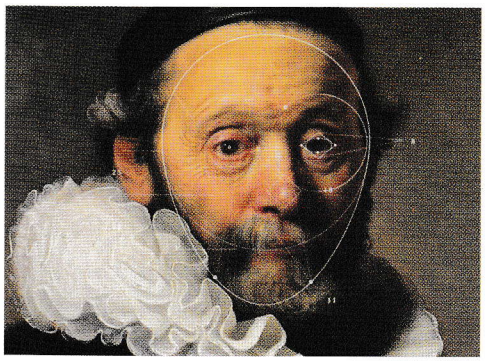
「AI」によってレンブラントの贋作？を制作するプロジェクトがある。レンブラント全作品の色調や筆遣い、ハイライトの特徴などを分析し、そのエッセンスを捉えたとのことである。モニターの画像解像度では素人目にはとても区別のつかない出来栄えであった。しかしながら、「AI」が作成した作品はオリジナルとは言わない。如何にレンブラントの特徴を捉え、踏襲したとしても美術品として評価はされないであろう。それは、その作品に「Creativity」が欠けているからである。オリジナルの全てはレンブラントの才能とそれを培ってきた人類の歴史にある。「AI」は人類の資産の上に土を盛ったものと考えられている。

今後、クリエイターの存在理由は「Creativity」において人間が持つ唯一代わるもののない機能（職能）として高まっていく。クリエイティブであることは、人類に残された優位性の貴重な一部であり、アーティストは五感を駆使し、その感性によって時代の前線に立つ有力な職能である。その他にも、発明家、新たな学究、新しいビジネスモデルなどを担う人たちがクリエイターといえる。新しい発想や技能が今ほど求められることはないといってよい。人類の歴史上、人類以外と知性が争われることはなかった。今一度その価値について再考を図りたい。人類の資産として「Creativity」をどのような位置づけとし、どのように活用するべきか、発展軸をどこに求めるか、などである。さらにその創造性は常に持続させ続け発展させていく必要がある。というのも、「Creativity」も瞬時にITやSNSによって消費させられ、「AI」の記録の一部に組み込まれることになるからである。

「Creativity」、「Management」、「Hospitality」は受益者である人間に対し、それぞれ人間相互のコミュニケーション・表現に依存しながらサービスすることを前提としている。それ故に「AI」にとって代わられ難い能力とみられている。しかしながら、「AI」が将来持つおそれのある価値観の中には「受益者としての人類」という概念が無くなるかもしれない。それが遠い未来のことであることを少なからず願いながら、来るべき未来に興味は尽きない。



「The Next Rembrandt」by AI



rembrandt_features

computer aided design

年頭にあたって

景観シンポジウム委員会委員長　本　耕一

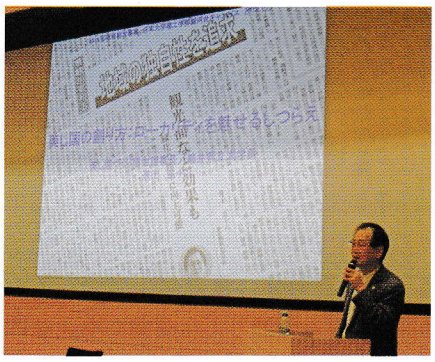
よりよい都市景観をつくっていくには建築や外構・アートなどが一体となって考えられていることが大切である。「日本建築美術工芸協会」ではこうした強い信念のもと、活動を行っている。当委員会では年に2度の「景観シンポジウム」を開催。建築や美術作品や、そのコラボレーションエピソードの紹介にとどまらず、そこに置かれるアート、そこで出来上がる空間、景観、街、つくる時の対立や共同、維持・メンテナンス、お金、持続性など、様々な視点や切り口からそれらを読み解き、議論をする場にしていきたいと考えている。そんな意味で、「日本建築美術工芸協会」の活動の中でも大きな事業の一つといえる。

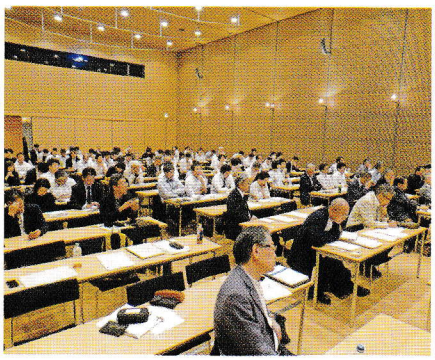
昨年10月1日に開催された景観シンポジウムでは、「ローカリティを魅せるしつらえ」～建築、ランドスケープ、アートの所作～と題し、ランドスケープアーキテクト、建築家、キュレーターによるシンポジウムが行われた。（詳細については本誌p.20参照）一般にはコラボレーションがうまくいった事例を紹介しながら展開するシンポジウムが多い中、今回はそれぞれのパネラーのそれぞれのプロジェクトとお題を結び付けて語っていただいた。さらには年齢も各年代にわたっていたので。異種格闘技戦の様相になるのかと思われた。しかし以外にもシンクロする場面の方が多かった。その共通（シンクロ）する視点は、風景・景観をつくるためには人の「営み」が大切であるということ。それぞれの風景づくりには違いがあるものの、めざしている空間にわざと余白をつくり、そこで行われる人の営みが風景をつくる。さらにはそれぞれの関係性が営みにより変化したり、育んだり、培われる部分があるということが大切である。景観にとって良いアートとは、そこで生活をしている人の生活がにじみ出てくるような、また、そういうことを促す仕掛けとなるアートのことでは。そして、シンポジウムではローカリティとは、たくましいこと。究極は人とそのたくましいアクティビティそのものが「魅せるローカリティ」という結論に至った。

ここで注目したいのは、人の「営み」という「時間軸」の概念が意識されるようになった点である。この建築美術工芸協会が発足した30年前は建築やアートは完成したらおしまいという時代であった。出来上がってきれいな竣工写真を撮影したり、展覧会を開催することで作品としての完成を迎えるという考え方が強かった。このシンポジウムの結論にみられるように、今、時代はハードではなく、そこでどんな営みが行われるかが重要な時代に変わっている。ハードを中心とした有形の時代20世紀から、「時間軸」の概念と「ソフト」を喚起する無形の21世紀へと時代は完全に変化している。

またそれと同時にデジタル技術の発達やSNSなどの普及による情報ネットワークの変化もめまぐるしい。今までの枠組みには当てはまらない新しい分野もどんどん生まれている。さらには、その新しい枠組みで生まれる新しい関係性によって、価値観も異なってくる。今までアートとして扱われなかったアニメや漫画のキャラクターがアートとして評価されたり、人の営みによってつくられる時間のかかるものがアートであったり、一方で瞬間で消えてなくなるデジタルアートも分野として確立している。このように時代は新しい時代へと着実に、いやすごい勢いで変化している。景観シンポジウム委員会では、これに遅れることなく柔軟に対応しながら面白い企画を今後も提案していきたいと考えている。

是非こんなことを取り上げてほしい、こんな企画があったらおもしろいなど、ご意見ご希望がございましたら、ご連絡をお待ちしております。　（もと　こういち）





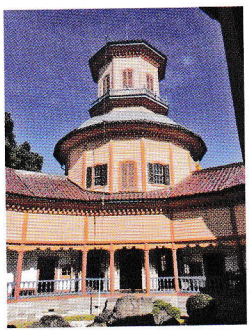
景観シンポジウム「ローカリティを魅せるしつらえ」

年頭にあたって

会員交流委員会委員長　**廣角京一**

会員相互間のコニュニケーションを図るため、会員交流委員会では、年１回の建物視察会と年２回の芦原義信杯（懇親ゴルフ）を行っております。

先ずは、2017年の第12回山形・酒田・鶴岡地区建物視察会を写真中心に説明します。



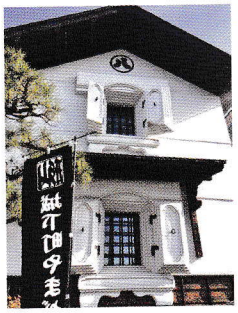
旧済生館本館

魅力がいっぱい
本県の建物巡り
日本建築家協会

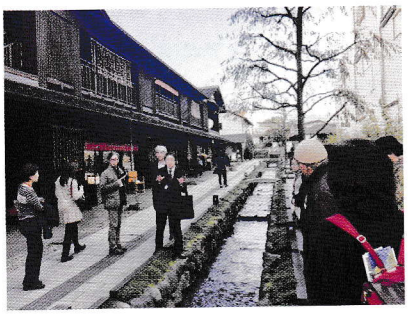
山形美術館について説明を受ける参加者＝山形市

山形新聞（11月11日）朝刊で紹介

擬洋風建築の旧済生館本館を見学（写真左）。山形美術館では設計担当をした本間利雄設計事務所の本間副所長から説明を頂き（写真右）、同美術館所蔵の吉野石膏コレクションほか数々の名画を鑑賞。



丸八やたら漬



水の町屋 七日町御殿堰

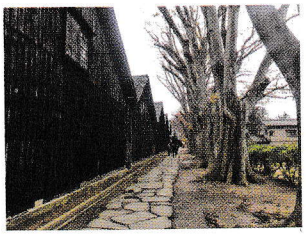
昼食は築100年の地元漬物店の蔵座敷で（写真左）。

歴史ある街並みで至るところに蔵跡が散見される。水の町屋では本間副所長から参加者に御殿堰の説明を頂く（写真右）。

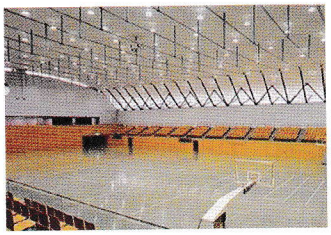
文翔館（旧山形県庁）

天童木工

重厚な造りの文翔館（写真左）を視察し、柳宗理の「バタフライスツール」で有名な天童木工の製作現場を視察。お忙しい中ご案内頂き、貴重な体験をさせて頂きました(写真右)。



山居倉庫郡



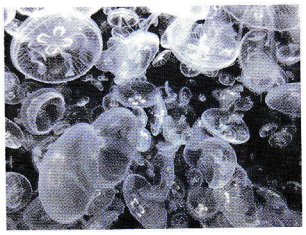
酒田市立国体記念体育館（HPより）

江戸時代の西廻海運の起点である酒田港にある山居倉庫群は当時の活況がよく伝わる（写真左）。

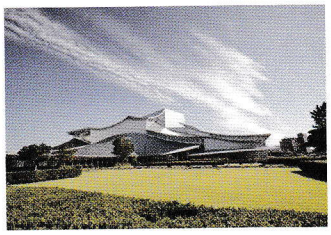
体育館は張弦梁による屋根構造が採用されてすっきりとしながらも広い空間を確保（写真右）。

土門拳記念館（HPより）

すばらしい風景に囲まれた日本最初の写真専門美術館を視察。



鶴岡市立加茂水族館



鶴岡市文化会館（HPより）

直径５ｍの水槽に漂う約２千のクラゲ（写真左）。

竣工したばかりの鶴岡市文化会館は、複数の屋根と壁が直線的でなく柔らかく重なる不思議な形状。妹島和世建築設計事務所の池田様と鶴岡市の職員の方に館内を丁寧にご案内頂きました（写真右）。

◆一泊二日の行程で、一度にこれだけの訪問先を廻ることができる企画「aaca建物視察会」ですが非常に駆け足で巡ります（?!）

◆春・秋に開催する「芦原義信杯（懇親ゴルフ会）」では、毎回多くの方に参加頂き、楽しく会員間の交流を深めており、昨年は第50回目を数えるに至りました。

年頭にあたって

文化事業委員会委員長　小谷純造

新年明けましておめでとうございます。

日頃は文化事業委員会の活動にご協力頂き誠にありがとうございます。引き続き積極的に委員会活動への参加をよろしくお願いいたします。

平成30年度は、ご存知のように当協会は30周年という節目の年であり「30周年記念事業」として様々な企画を実施しております。

文化事業委員会としての活動は、その時々に注目されている建築家、設計者の講演会の企画・実施と表彰委員会が企画されているaaca賞・芦原義信賞の「受賞者紹介のつどい」を実施しております。

今年度は、4月と6月に「aaca賞受賞者紹介のつどい」を行い8作品のご紹介をして頂き意見交換を含めて懇親を深めることができたかと思います。

また、今年は30周年記念事業にふさわしい新たな試みとして連続講演会+シンポジウムを企画し、10月、11月、12月に下記3回の講演会を実施しました。そのまとめとして2月には「これからの都市景観のあり方を探る@GINZA」というテーマでシンポジウムを開催いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

来年度に向けては、新たな企画やテーマも検討したいと考えております。皆様に積極的にご参加頂き充実した活動にして行きたいと思っております。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

＜連続講演会＞

§ 1. GINZA SIX　銀座の多様性 / 回遊性 / 持続性
　講師：鹿島建設　米田浩二氏
　　坂本弘之氏

§ 2. 東急プラザ銀座　「光の器」－ vessel of light －
　講師：日建設計　畑野　了氏

§ 3. GINZA PLACE　新しい銀座のアイコン－ FRETWORK －
　講師：大成建設　山本　実氏

＜シンポジウム＞

「これからの都市景観のあり方を探る @GINZA」

日時：2019年2月20日（水）15：00～17：45

会場：日本大学駿河台校舎1号館6階 CST ホール

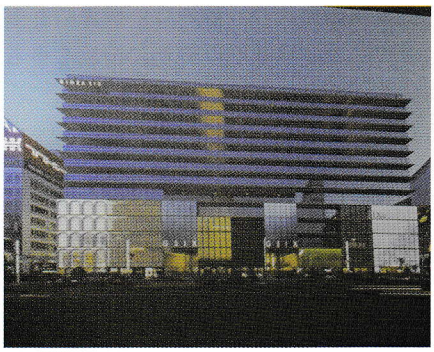
・基調講演　都市計画家　中島直人氏

・パネルディスカッション

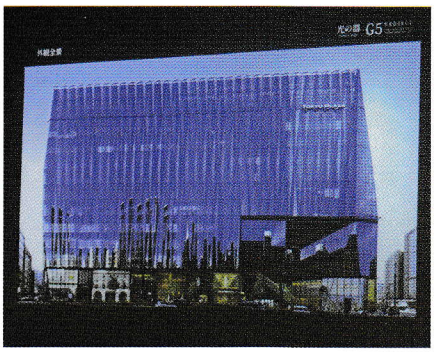
司　　会　陣内秀信氏

パネラー　中島直人氏

　　三浦　展氏

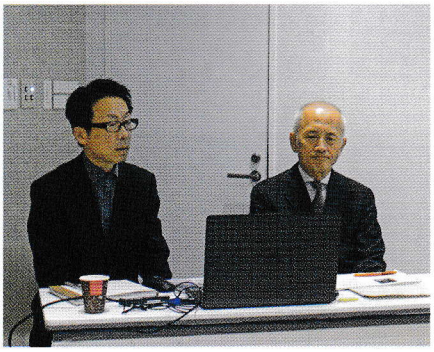


GINZA SIX



東急プラザ

GINZA PLACE



米田浩二氏（左）坂本弘之氏（右）

畑野了氏

山本実氏

年頭にあたって

展覧会委員会委員長　平山健雄

設立30周年の記念会を終え、新年を迎え気持ちも新たに建築と美術、工芸お互いの関わり合いを構築してゆきたいと考えています。いつも課題に上る各委員会同士の交流による試みも、展覧会を通して出来得る事を提案してゆきたいと思います。様々なジャンルに携わる会員の方達に展覧会委員会にご理解をいただいて委員会に参加していただき、aacaの活性化に繋げることが出来れば幸いです。

委員会の活動内容

年間に2度の展覧会を企画しています。一つは「BOX展」、もう一つは「街に飛び出す作品展」になります。それぞれ案内状、フライヤー、ポスターを作り、出展依頼を会員は勿論、各美術系の学校などに直接お伺いしたり電話、メールなどで出展をお願いしています。

BOX展に関しては、30cm立方の範囲内に自由な発想で空間意識を持った作品を出展していただいています。山﨑和子実行委員長の下、昨年の第2回目は50名を超える申し込みがあり、1回目に比べると色々な素材による作品があり、学生の出品も含め活況を呈していました。入場者の投票による賞も加え、又、スポンサーからの副賞もあって、楽しい展覧会になったと思います。展示台も前回の反省から委員会のメンバーで自作したものを使い好評でした。

街に飛び出す作品展は安河内実行委員長の下、アートワークが実際の建築物に設置されるまでの過程を各委員が経験をしながら「街なかミュゼ」として街の景観創造に寄与すると云う、aacaの理念に沿った企画が昨年で5回目を迎えました。スターツCAM株式会社の第1回目からのご協力により、昨年は6件の物件が提示され、54名の応募がありました。出展者はaacaのホームページより物件の情報を予め確認して、何処の建物に設置をするかを選ぶ事も出来ます。もしくは何処にでも、と云う選択もあります。展覧会最終日までに推薦選考委員が作品を選定、aacaから推薦状が渡され、スターツCAM株式会社様からはスターツオーナー賞が作家に対しての副賞として目録が渡されました。各物件の竣工が近くなる頃に建物オーナー様の最終判断により「街なかミュゼ」として一年間設置される作品が決定される事になります。一年後、作品をお買い上げいただけるかの判断をオーナー様にしてもらい一区切りとなります。昨年は第3回設置作品の内3点をお買い上げ決定し、第4回の作品が4ヶ所に設置されています。又、「街なかミュゼ特別委員会」として物件プロジェクトに作家を推薦する試みも成果を上げつつあります。第5回はどの様な作品がオーナー様に選定されるか委員会としても楽しみでなりません。

2019年3月には30周年記念事業の最後として、委員会では「街なかミュゼ」で設置した作品の見学会を企画しています。理事の皆様を中心に多くの会員の皆様に参加をしていただき、展覧会委員会の活動をご理解していただきたいと思っています。

今年は第3回BOX展、第6回街に飛び出す作品展を控え、各委員の活動の充実さが要求される年になります。展覧会は各会員の交流はもとより新会員の入会の良い機会にもなり、展示された作品が現実の建築空間の美化に携わる事も出来る、aaca本来の目的に沿う意義ある企画事業です。

会員の皆様の委員会への参加をお願いして、新年のご挨拶とさせていただきます。

第2回BOX展

表彰式

第5回街に飛び出す作品展

レセプション

年頭にあたって

フォーラム委員会委員長　立石博巳

新年明けましておめでとうございます。

私どもフォーラム委員会では、委員一同が清新な気持ちで新年を迎えました。

aaca30周年のイベントが会長、役員、理事会を中心に委員会、個人・法人の会員皆様が一丸となり、推進中であります。フォーラム委員会も昨年は、(第192回)藪前知子先生、(第193回)須藤玲子先生、(第194回)平山健雄先生お三方の素晴らしいご講演を頂戴いたしました。特に平山健雄先生は、現在のフォーラム（当初はaacaトークと称しておりました)第1回の講師をされた大伴二三弥先生（海外、国内のステンドグラス)のお弟子さんであったという事で連綿と継承されているという証となりました。

私事で恐縮ですが、私は1968年aacaの前身の任意団体建築美術工業協会が設立されましたが、当時私の先輩で上司でもあった竹原慶昌氏（装飾部長)が発起人の一人となり、発起人総会が当時の髙島屋の8階の食堂で開催され、スタートいたしました。その時、竹原先輩は、私に「この協会は他にない建築、美術、工芸の専門家、制作者、関連の人々が集まり、大変重要な協会だから君頼む」と述べられ、それから50年の月日が経過しました。

そして委員会の中でも歴史と伝統のあるフォーラム委員会委員長を拝命しておりますので未来に向けて、本年も会長、役員、理事、委員、個人・法人の会員の皆様のご協力、ご支援を賜り、事業の発展維持継承に尽力いたします。30周年記念誌のフォーラム委員会の報告にありますように内容につきましては、実にバラエティーに富み、多様性を持っており、建築、街づくり、アート（美術工芸)、短歌・俳句・落語・講談・能・歌舞伎・文楽・邦楽などの伝統芸能、音楽、ファブリック、(国内外)日時計など様々な分野に挑戦してまいりました。3月には、30周年の掉尾を飾るフォーラムを開催の予定です。

また、新年度からは、美術、工芸の新入会員を初め、ご希望の方々を中心にメインフォーラム以外にミニフォーラムを開催したいと考えて、今から構想を練る方向で検討いたしております。いずれにいたしましても皆様のご協力なしでは成功は難しいので、改めましてご支援、ご協力を伏してお願い申し上げます。

年頭にあたって

広報委員会委員長　飯田郷介

新年あけましておめでとうございます。

会報は、昨年より季刊となり、1月（新年号)、4月（春号)、7月（夏号)、10月（秋号)と年4回、皆様のお手元にお届けいたします。今回は、初めての新年号となりますので、各委員会の委員長の皆様から、新年のご挨拶、それぞれの委員会の活動の近況、そして新しい年を迎えての方針などをご紹介いただきました。各委員会では、シンポジウム、講演会、展覧会、ゴルフコンペ、建築や美術館の見学会などの楽しいイベントが開催され、イベントの後には交流会なども催されて会員皆様の親睦も深められています。また各委員会メンバー同士の交流会なども催され、楽しい活動を展開していますので、会員の皆様は、今年は是非どこかの委員会に参加いただければと思います。

広報委員会では、協会内外への広報活動、会報の編集・制作、ホームページの制作などを行っています。会報は年4回の発行ですが、ホームページでは、aacaニュース、催し物、会員の活動、事業報告などの最新の情報を発信していますので是非ご活用ください。毎月開催される広報委員会の終了後には、毎回美味しい食事処を探して親睦を深め、また美術展や美術館めぐりなども行い、美味しい、楽しい委員会を目指しています。

会報は、会員皆様の貴重な活動の発表の場でもありますので、皆様の寄稿をお待ちしております。

今年も、協会と会員皆様を繋ぐ役割を果たすべくまた協会外への情報発信に向け、広報委員会委員一同、力を合わせてまいりますのでよろしくお願いいたします。

芦原義信生誕100年を迎えて

正統なモダニズムの継承者　芦原義信（3）

広報委員会委員長　飯田郷介

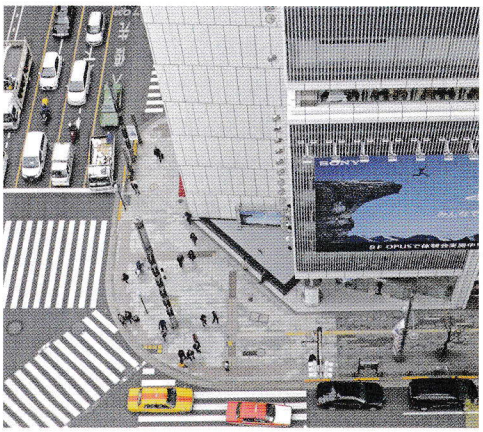
サウナをこよなく愛した プロフェッサーアーキテクト

昭和35年（1960）10月、ロックフェラー財団から奨学金を得て、再度アメリカ、ニューヨークへ留学した。そして翌年の4月、留学から帰国すると東京オリンピックの駒沢公園体育館・管制塔（給水および管制機械室）の仕事が待っていた。一連のオリンピック施設設計の担当の割り振りは岸田日出刀が行ったと言われ、芦原義信にも駒沢が割り振られたということである。敷地全体のマスタープランは、高山英華が行い、競技場（サッカー場）は村田政真、屋内球技場（バレーボール）とホッケー場は東京都の施設建築事務所に割り振られていた。芦原義信は法隆寺の夢殿をかたどった体育館とそれとは対照的に、五重塔を模した管制塔を設計した。駒沢公園体育館はレスリング会場に、屋内競技場はバレーボール会場として使われ、東洋の魔女と呼ばれた日本チームはこの大会で回転レシーブを披露し、宿敵ソビエト連邦を決勝で破り、金メダルという快挙をなしとげ、決勝戦のテレビ視聴率がスポーツ中継歴代一位とも言われる85パーセントという驚異的な数字を記録した。

そして昭和38年（1963）、またしても大きな仕事が舞い込んできた。戦後の東京復興計画コンペの応募図面作成の折、新宿駅の路線図を描いた井上公資がソニーの宣伝部長となって、芦原の事務所をひょっこり訪ねてきて、「芦原さん、今度数奇屋橋にソニービルをやるんだけど、いま井深さんや盛田さんが待っているからすぐ会いなさい」*1と連れていかれ、ホテル・オークラの一室を借り切って、井深大社長、盛田昭夫副社長と徹夜で大議論しながら銀座ソニービルの計画案を検討した。盛田が「とても地価の高い場所であるから何を売ってもペイしないならば、いっそ全館をショールームにしては」と全館ショールームになった。「横の銀座が縦になった」と言われる銀座ソニービルが昭和41年（1966）、銀座の一等地に姿を現わした。世界にも例を見ない独特な90センチメートル段差の連続階構成の「立体プロムナード」と名付けられた建築である。建物のデザインは芦原義信が「ソニー製品にあらわれている質のよさからくる正確さ、無用な装飾を排した機能的美しさなどであって、それはまさに20世紀初頭からとなえられた近代建築の精神にも相通じるものであった。そのために、広告塔であるとか、ごたごたしたものを一切よして、よごれのない白色の材料や金属そのものの材質を中心に、大きな製品であるかのごとく表現してみたつもりである」*2と語る“正統なモダニズム”建築である。

芦原義信は、ソニービルが完成した頃、フィンランドのイヴァスキュラ芸術祭に招かれ講演を行った。そして初めて訪れたフィンランドの白夜の湖畔で入ったサウナに魅了された芦原はフィンランドからお釜を送ってもらい自宅に角材を校倉式に組んだサウナをつくった。「サウナに入らない時は、給湯によって露天風呂をあたため、薬屋で売っている温泉の粉をパッパッと入れる。たった一秒で北は登別温泉から南は別府温泉まで、それらしい雰囲気がでてくる。東京の交通難の折りから日本中の温泉にたった一秒で行けるなど、とてもうれしい。これを私はインスタント・日替わり露天風呂と称して、週末にエンジョイしている」*3と親近感を覚えるコメントを残している。パリに出かけた折にも「帰国したら自宅の庭の露天風呂に奥飛騨温泉の粉を投入してゆっくり風呂に入ることなど夢みながら一九九〇年の新年をパリで迎えたのであった」*3とサウナとインス

銀座ソニービル


ソニー広場

タント・日替わり露天風呂をこよなく愛した。このサウナは、現在でも芦原家に残されている。

*

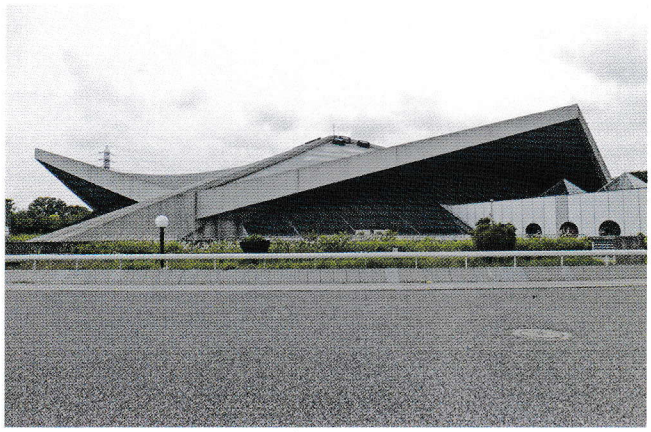
芦原義信は、37歳から大学で教鞭をとりながら設計活動を行うプロフェッサーアーキテクトを晩年まで続けた。アメリカ留学から帰国した昭和30年（1955）法政大学で教鞭をとるようになり、昭和34年（1959）法政大学の教授に、それから10年間法政大学で教えた。その後、昭和39年（1964）武蔵野美術大学で造形学部産業デザイン科に建築デザイン専攻を新設することになり、その主任にと声がかかり、「自由に先生集めていいからというので、大学系列とかそういうのは一切抜きでやりました。（中略）それから校舎も設計させるというでしょう。それはいいなあというので、法政からひっこ抜かれて」[*1]武蔵野美術大学へ入り、そして武蔵野美術大学鷹の台校舎（1964）、アトリエ棟から始まって、鷹の台ホール、美術資料図書館、本館、昭和47年（1972）の体育館まで、大学のキャンパス造りに長いレンジで取り組んだ。

そうしているうちに、今度は吉武泰水教授から東京大学工学部建築学科に建築計画や設計を所掌する講座を新設するので来るように言われて、1970年6月に初代教授として移り、停年まで9年間東京大学に在籍した。村松貞次郎は「東大建築学科を卒業した芦原義信は、1970年から79年の停年退官まで母校の設計講座の教授の席にあった。その穏健・無色で、しかも論理性の高い作風が、設計の教師として適任という見地からの人事だったと思うが、吉武泰水の後を受けての人事として、やはり最適解だったと今からでも思われる」[*3]と芦原の才能を評している。そして芦原は停年退官後、武蔵野美術大学へもどった。

芦原義信の代表作である銀座ソニービルは、2017年3月31日に閉館し、多くの人々に惜しまれながら解体された。銀座ソニービルの交差点に面した敷地の隅切りの部分には十坪ほどの小空間があった。これは芦原が「ソニーの井深大さんや盛田昭夫さんに10坪（33平方メートル）ほどの角の土地を開けてくれるように頼んだ。『あそこは地価が高いんだよ』といわれながらも、承知してくださった。いまでは人々の出会いの場になっている」[*4]と芦原義信が提案したものである。銀座のシンボルであったこの小さな広場は、「建築の常識からいって、交差点に面した敷地の隅切りの部分にビルの入口をとるべきであるかもしれないが、この場合、あえて常識に反して、サンクン・ガーデンにしてある。そのうしろにそそりたつ白い壁を背景として、このサンクン・ガーデンは数寄屋橋の屋外舞台として四季おりおりの変化に応じた展示が行われることと思う。道路と建築以外に外部空間のすくないわが国の都心に、人間的なうるおいがあたえられ、ニューヨークのロックフェラーセンターのように、このソニー広場はトランジスターラジオのような小さいが性能のよい都市空間として、市民に奉仕してくれることを信ずるのである」[*2]と語る芦原義信が銀座の超一等地に残した「街並みの美学」の大きなメッセージでもあった。

出典

＊1『日本現代建築家シリーズ⑥　芦原義信』新建築社
＊2『新建築』1966年7月号
＊3「正統なモダニズムの継承者」村松貞次郎『日本現代建築家シリーズ⑥』新建築社
＊4『秩序への模索　これからの都市・建築へ向って』芦原義信著　丸善


駒沢公園体育館

現在でも残されている芦原義信が愛した露天風呂

会員活動レポート

アーティスト・イン・レジデンスでの試みから

陶芸作家
日本建築美術工芸協会会員
須齋尚子

陶芸は土と炎の芸術とも言われます。炎(焼成)は作品完成迄の最終行程です。現在は制作環境から電気窯での焼成を主としていますが、近年「炎の魔術」を強く感じる焼成法の体験に恵まれました。それを誘発した滋賀県立陶芸の森での創作研修作家としての2回の滞在制作についてご紹介いたします。

2015年（1ヶ月半滞在） アメリカンラク焼成

陶芸の森の素晴らしい制作環境だからこその創作をと頭を捻った折に、ふと頭に降りてきたのが約15年以上前のアメリカでの衝撃的な体験、アメリカンラク焼成でした。熱い炉から高温のまま美しいオレンジの飴色に輝く作品を引き出し、素早く籾殻を入れた容器に移し、すごい煙に巻かれながら更に籾殻をかけて急いで蓋をする。その還元状態で暫くおいてから取り出し冷水へ。暫くの浸水後綺麗に洗い流して完成。というスピーディでドラマティックな変化に心が踊る焼成法です。土も釉薬も環境全てがアメリカとは違う不安を抱きつつ私なりに準備を進め、スタッフの方々にお力添えも頂き2度目の体験を果たすことが出来ました。長い時を経て少し自分に近いものとして蘇り、作業の緊張感と共に現れる質感や色彩の変化を再び感じ得ました。この焼成法ならではのキラキラ輝く色彩や釉薬の表情、貫入の現れは独特の魅力を放ちます。

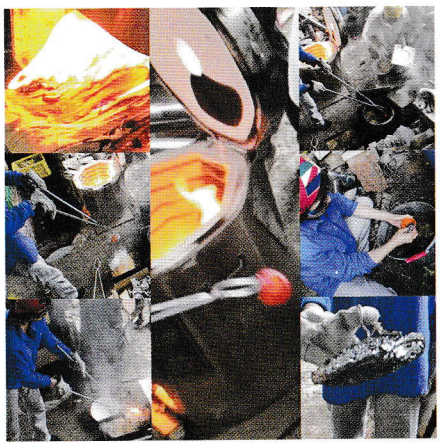
2016年（2ヶ月滞在） 黒陶焼成

自身の創作への迷いや模索、陶芸の森で出逢った多国籍の作家さんの制作に触れた刺激で自分の中に変化が生まれた中でした。求めるモノが何かをわかる筈もなく創作突入。無心に創る中で美しい曲線にこだわったオブジェたちが現れてきました。成形を終えた作品を見た作家さんに「形が美しいから黒陶にしてみたら?」との言葉を頂き、黒陶焼成とその黒い光をより深くする磨きの作業を試みる事となりました。様々な作家さんたちの経験談や窯業試験場での相談、心強いスタッフの協力でのチャレンジでした。磨き作業は道具や方法論を試しつつただただひたすら。焼成は窯の中に耐火煉瓦でもうひとつ窯を作り二重構造にし、更に内側を仕切りいくつかの部屋に。その各部屋で酸化金属を加える等条件を変えて籾殻や炭で作品を埋めての炭化焼成(ガス窯)です。焼成温度を変えての再焼成も試みました。結果、低温で仕上げた王道の黒陶焼成の作品はやわらかい質感と艶やかな黒を放ち、酸化金属で発色を狙い高温焼成した作品は赤や青の色味を帯びて硬く焼き締まりました。又、耐火煉瓦の密閉性の差による色調の変化も確認出来ました。窯を開け燃え残りの籾殻等を取り除いて作品と対面した瞬間をご想像くださいませ。

陶芸の森ではその他の焼成法含め新たな体験や見学、レジデンスならではの国際交流含め刺激的な宝物の時間が溢れました。

更に昨年は素敵なご縁で5年前から年1回薪窯焼成でお世話になっている奥会津三笑窯で上記焼成法を体験させて頂くことが出来ました。点が線になっていく。奇跡の連鎖です。 一連の焼成体験が何か少し古代から誘なわれているような想いも抱きました。

作品は焼成法に限らず本当にわずかな要素の差で様々な違いが現れます。委ねるところと意図するところ。突き詰めていくことは難しいですが、その違いを感じ得る素晴らしい出逢いと経験への感謝とこうしてカタチ(作品)に表現出来る幸せを感じています。そして叶うなら、生まれた作品たちがそれぞれに惹き合う場(空間、環境)を得てより魅力的な光を放てますようにと願っております。



アメリカンラク焼成風景 2017

制作風景 2016

様々な焼成法のオブジェたち

日本刺繍アーチスト

日本現代工芸美術協会　本会員
女子美刺繍「若草会」会員
日本建築美術工芸協会会員
品川未知子

1.私の作品制作スタンス

私は女子美術短期大学服飾科刺繍教室、専攻科と、3年間学び、刺繍研究室助手を経て、カルチャー教室講師、自宅での日本刺繍教室開催など、50年、刺繍を刺し続けてきました。日本刺繍の伝統的技法は活かすが、とらわれず、日本刺繍でしか表現できない作品に挑戦したいとの気持ちで制作してきました。

2000年～2018年、日本現代工芸美術展へ出品。2005年日展初入選、その後、「巨樹」、「モンサンミッシェル」、「青の洞窟」などが入選しています。私の作品の共通テーマは、「誕生」、「精霊」です。作品「巨樹」は、厚木市の妻田薬師の境内にある樹齢500年の大きなムロがある御神木の姿に、信玄小田原攻めの歴史と、樹霊と呼ぶべき「気の存在」を感じ表現しました。

作品「モンサンミッシェル」では、フランス旅行で高さ6mの大潮の日にぶつかり、羊が草を食んでいた城の周辺が押し寄せる海水の濁流であっという間に海になる光景、自然の神秘に感動しました。

作品「青の洞窟」では、イタリア・青の洞窟で、ボートの底に寝そべって洞窟の入り口を通過すると、中はこの世のものとは思えない、暗黒と青の輝きの神秘の世界でした。

このように、自分の体験の中で感動し、自分を超えた存在を感じたモチーフを追っかけて来ました。

2.日本刺繍作品の制作

作品にするプロセスは、①感動を、形にデザインする、②デザインを額装サイズに拡大、③絹シャンタンに作品を写す、④シルク布を刷毛染め、⑤撚り絹刺繍糸を染める、⑥染布を枠張り、⑦刺繍する、です。刺繍の作業は、枠張りした染布に対し、右手はいつも布の上、左手はいつも布の下に置き、①左手で布の裏から針糸を差し上げる、②右手で針を抜き上げ、③右手で針を布に刺す、④左手で針を受け止め、引き抜く、①～④の根気のいる作業をひたすら繰り返し、この繰り返し作業の中で、自分のイメージしているデザインが出来るまで刺していきます。糸は、釜糸と言う繭から巻き取っただけで縒りをかけてない絹糸、機械撚りの細、太、極太の白絹糸を好みの色に手染めして使用します。また、作品によっては絹糸にこだわらず、綿、麻、毛糸、レーヨン、撚り金糸、銀糸、・・・、などなど自由に使います。私にとって色糸は絵具です、線が面になり、面が厚さを表現していきます。

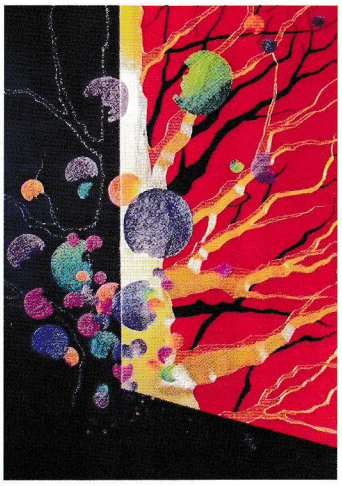
3.若草会活動と個展開催

若草会は、女子美術短大刺繍教室の同窓生による30代～70代のメンバーの約40名のグループで、隔年、銀座かねまつホールでグループ展を開催し、2019年に第20回展を迎えます。

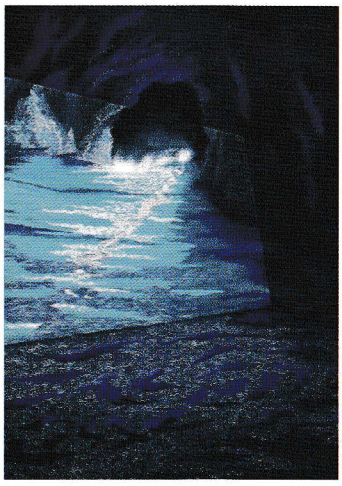
品川未知子としては、今までの刺繍制作の集大成として、本年2/19（火）～2/24（日）、銀座アートホールにて個展を開催しますので、是非、ご来展下さい。

4.終わりに

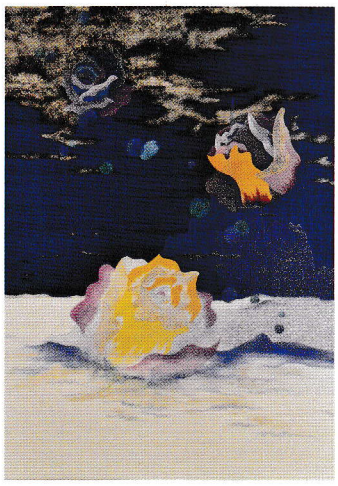
第5回街に飛び出す作品展では、設置計画に相応しい作品に選ばれ推薦をいただきありがとうございました。会員の皆様より日本刺繍を活かせる方法、場所のアイディア頂けたら幸いです。



巨樹－明と暗



青のカオス



モンサンミッシェルの記憶

芸術と建築

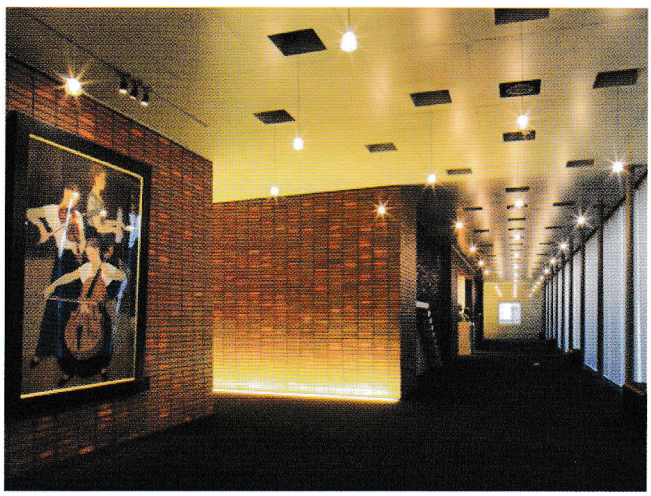
日本画作家
師　大山忠作（2009年逝去）
公益社団法人日展 準会員
新日春展会員
日本建築美術工芸協会会員
岡本明久

最近の季節感のなさは社会全体の傾向であるのか。時事刻々凄まじい速さで変化する流行の波に翻弄されてしまっているのか。便利さの功罪の中で好むと好まざるに関わらず、享受することに慣らされているわたしたち現代人は、果たして何を得、何を失ってきたか。日常の様々な場面の中でもふと目を止めて見ると確かに自然の中には、それがどんなに小さくても、生命の営みがあり、鋭く研ぎ澄まされた均整のとれた美しさを備えているのに驚かされることがある。アートすることで、より快適に過ごしやすく、より健やかに眠り、より豊かに心が癒される空間を求めることで確実に寿命を伸ばしてきた人類史があった。産業革命以来、建築と芸術空間の多様性が市民レベルで広がり、機能的に無駄のない生産力向上と効率化される社会体制にあって、葛藤し彷徨、如何に多くの犠牲を払って勝ち取ってきた事か。人として生きる価値観の方向性もここに突きつけられているのかもしれない。タンパク質と赤血球で構成された有機的生命体である人の生み出すエネルギーと金属と油で構成された無機的機械体の生み出すエネルギーのバランスと融合が現代の科学文化の位置と方向性をもちつつあるのだろうか。家具であったり、照明であったり、ドアや絨毯、生活の隅々において好みの物との対話が存在している。特に日本の伝統文化には、奥の深い長い歳月に培われた師匠の技がある。守り受け継ぎ、洗練しつつ開花させる原動力は自然が有する造花の心。未来にあっても忘れてはならない物。人の森羅万象への客観的洞察力と観察力は未知の造形力となり自由な創意工夫への原動力となりうるか。

自然にはもう一面、苛酷であり厳しく弱肉強食の定めと、人口の増加と食物連鎖のわずかな狂いによって、激しく変化する環境とがある。建物は単に風雨を凌ぐためばかりではなく、自然の限りない美しさや優しさ、心地よさや穏やかさを取り込み、厳しい環境から子孫を生活を守り、各地方の土地の持つ特異性や住環境における民心や季節や流行など、様々な人を守り育てる揺り籠のようなオアシスでもある。絵画と建築は過去現在未来と形を変えながらも最も人生に相応しいい形で人類共通の文化を形成した感があり、人と宇宙と自然への問いかけはこれからもアートする中で答えを求め続けていくのかもしれない。若い生命を持つ子供らへのアートの引き継ぎは社会人である大人の責務であると思う。普段何気なく見ている都市や町や田舎にも自然の猛威から人の暮らしを守り、美しい連携を導き出しているのに感動を覚える。建築と芸術との連携が、癒しであり、糧であり、調和であり、活力であり、渇望であり続けることを祈る。

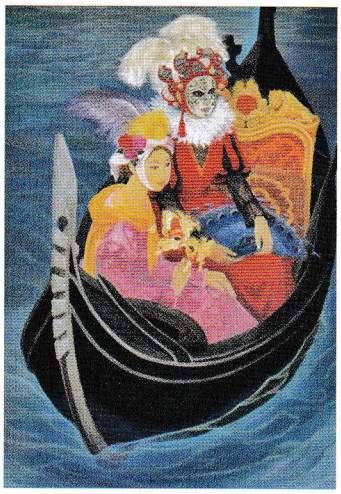
御縁あって、昭和学院（千葉県市川市）の新校舎と新施設事業計画にあたり、伊藤記念ホールに150号日展特選「旋律」を飾られることとなりました。当初より日建設計との打ち合わせに参加させて頂き作家冥利につきる至福と感謝しております。

大山忠作先生より薫陶を受けた「日々精進」を指針とし、制作しております。



昭和学院　伊藤記念ホール　エントランス

P150号「稽古」



P150号「装」

織物による異素材の融合と新しい出会い

ファイバーアーティスト
日本建築美術工芸協会会員
深尾雅子

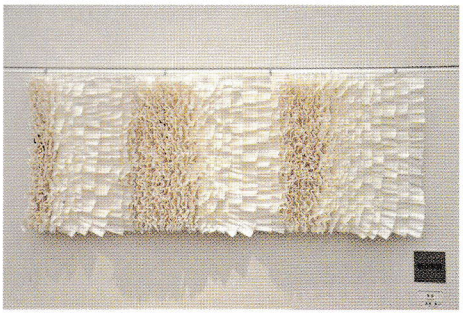
高校時代に、手にした手芸雑誌に載っていた小さな織り機を手に入れたことから、私と織物の関わり合いがスタートしました。説明書を読みながらなんとか布をひとつ織り上げたとき、何ておもしろい世界なんだろうと思いました。それは、コツコツと織る手仕事でありながら、数学的な要素も必要で、それでいてインスピレーションに溢れた創作もできるというなんとも複雑な世界でした。そんなことをきっかけに美大に入り染織科を専攻することになりました。大学では、基本的な織物の勉強の他に、ファイバーアート＝編む、組むなど織に捕われない技法での繊維を使った芸術制作についても学びました。ちょうど現代美術全盛の時期で、その影響を受けたテキスタイルによる芸術活動にも触れることができ、その世界は多いに興味のあるものでした。卒業後、カルチャーセンターで手織り講師を始め、現在は4つの教室を担当しています。

手織り教室でオーソドックスな手織りを教える一方で、ファイバーアーティストとしてのテキスタイル作品の制作も行っています。1990年代からはミニアチュール展での制作を主に「Soft & Hard」というテーマで、様々な天然繊維や古裂布、アルミ板やワイヤー、アクリル板、電子部品など硬さの違うものを組み合わせて、凝縮された空間に向けての制作を行っていました。その後2011年に新制作展のスペースデザイン部に出品する機会を得てからは、国立新美術館という大きい空間での制作が始まりました。「Soft & Hard」に加えて「異素材の融合」を新しいテーマにし、さらに様々な素材を使って制作を始めました。選んだものはおよそ織物とは無関係に見えるもので、紙テープ、ポリエチレンテープ、各種金属ワイヤーなどです。これらは、自在に染めることのできる天然繊維とは違って、既製品なのですでに決まった色が着いています。その制約のある中で、自分のイメージ通りになるよう工夫し、もとある素質とは違った個性的な美しさを引き出せればと制作をしています。

現在の建築物を飾るテキスタイル作品は大体が天然繊維で作られています。その素材は耐久性や耐光性に乏しく寿命が短いです。そのため建築物の長期的な装飾として使うことは避けられてしまいがちに思います。しかしテキスタイルの持つ柔らかさや暖かさは硬い建築物にとって必要不可欠なものではないでしょうか。

新しい技術が日夜研究されている今、繊維の常識を打ち破るような新素材が生まれないかと期待しています。一見、硬いようで柔らかいもの、普通の繊維に見えるけど耐久性や耐光性が抜群とか・・・そんな新素材を使って建築物の外壁をも飾ることができるタペストリーを織ってみたいものです。

1998年イタリアコモミニアチュール展
出品作品



2016年新制作展　新作家賞受賞作品

2012年新制作展　出品作品

法人会員の企業活動を訪ねる

大塚オーミ陶業株式会社を訪ねて

広報委員会

日本建築美術工芸協会が設立された1988年に入会された大塚オーミ陶業株式会社は、昭和48年（1973）に会社を設立されました（本社：大阪市）。大塚グループの一つの大塚化学が鳴門海峡の砂を使ってタイルを製造出来ないかの検討をしたのが始まりで、更に高度な製造技術力を得るために、滋賀県信楽町に、製造工場を置きました。事業内容は、大型陶板、陶板名画、レリーフ、テラコッタ、OTセラミックス、肖像陶板、サイン陶板の各種の設計・デザイン・製作・施工という独創的な陶板技術の分野で事業を展開されています。

事業の展開は、「オリジナル作品の製作」では、学校・企業の周年事業や施設のエントランスあるいは建物の外壁などを大型陶板が飾っています。「美術作品の再現」では、世界の名画や現代の作家の作品、古画、書などの原画が再現され、オフィスビルのエントランスホールや地下鉄の駅など身近なところでアートに触れることができます。丸の内オアゾのエントランスホールには、パブロ・ピカソの《ゲルニカ》（写真1）が展示され、地下鉄の駅では東京メトロ千代田線赤坂駅に千住博の《四季樹木図》（写真2）、副都心線新宿三丁目駅には千住博の《Waterfall》（写真3）が、都営大江戸線の築地市場駅には片岡球子の《江戸の浮世絵師たち》（写真4）、りんかい線天王洲駅には加山又造の《千羽鶴》など大きな作品が展示されています。

「文化財の分野」では、龍谷大学大宮図書館トルファン「ベゼクリク仏教遺跡請願図」再現（2003年）、関西大学千里山キャンパスに「高松塚古墳壁画再現展示室」設置（2008年）、キトラ古墳壁画体験館に「キトラ古墳壁画」を再現（2016年）など古代の壁画などが再現・復元されています。「屋外サイン」では、環境劣化の少ない陶板の特長を生かして、屋外のサインとして活用され、箱根大学駅伝のゴールとなる読売新聞社本社前には安藤広重の《東海道五十三次》（写真5）の一部が飾られています。「外壁装飾」では、国会議事堂中央塔屋根テラコッタ改修工事（1989年）、大手町野村ビル（写真6）、三井住友銀行東館の壁面モニュメントなど誰でも一度は見たことがある作品を製作しています。

陶による文化財の複製技術が評価され、2018年には、第7回ものづくり日本大賞：伝統技術の応用部門で内閣総理大臣賞を受賞されました。

写真1　パブロ・ピカソ《ゲルニカ》

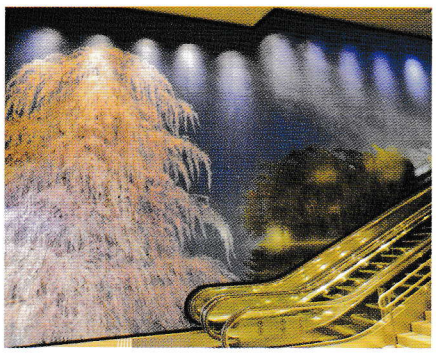


写真2　千住博《四季樹木図》

写真3　千住博《Waterfall》

写真4　片岡球子《江戸の浮世絵師たち》

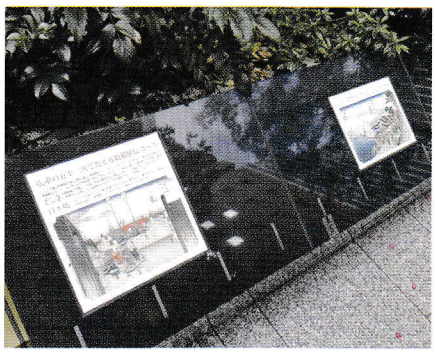


写真5　読売新聞社本社

写真6　大手町野村ビル

（撮影：飯田郷介）

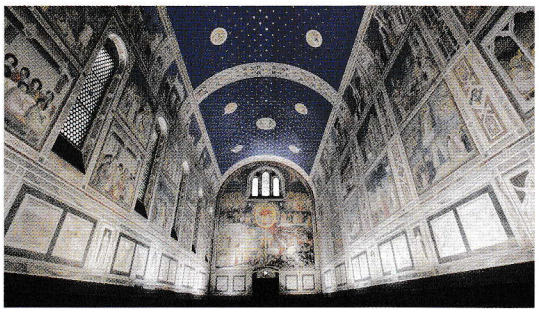
□世界初の陶板名画美術館「大塚国際美術館」

大塚国際美術館は、大塚グループ創立75周年記念事業として、「永年大塚が徳島県にお世話になったお礼のために」と大塚グループ発祥の地である徳島県鳴門市に設立された、日本最大級の常設展示スペース（延床面積29,412㎡）を有する「陶板名画美術館」です。館内には、古代壁画から世界26ヵ国、190余の美術館が所蔵する現代絵画まで西洋名画1,000余点が大塚オーミ陶業の特殊技術によってオリジナル作品と同じ大きさに複製・再現されています。この陶板名画は、約2000年以上にわたってそのままの色と姿で残るそうです。瀬戸内海国立公園内に建設された美術館の建物は、殆どの部分が地下となっており、メインエントランスを入るとまず「システィーナ・ホール」が迎えてくれます。システィーナ礼拝堂の天井画と壁画を空間ごと立体再現した展示は、現地さながらの臨場感と迫力が味わえます。今話題になっているフェルメールの《真珠の耳飾りの少女》などは、とても陶板とは思えない、原画と見まごうばかりの作品です。エル・グレコの祭壇衝立復元では、ナポレオン戦争で破壊された衝立を日本・スペイン・イタリアで共同制作し、スペインのプラド美術館、ルーマニア国立美術館所蔵のエル・グレコの作品6点を同時に見ることができます。レオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》は修復前と修復後を比較して見ることができ、門外不出のパブロ・ピカソの《ゲルニカ》も原寸大で再現されています。さらに今年は開館20周年記念事業として陶板で再現したゴッホ作“花瓶のヒマワリ”全7点が一堂に展示されており、太平洋戦争で焼失した作品が鑑賞できるのも大塚国際美術館ならではです。鑑賞ルート約4kmからなる広い館内では、古代、中世、ルネサンス、バロック、近代、現代の世界の名画を日本に居ながらにして楽しむことができ、また足を運びたくなるとても素晴らしい美術館です。

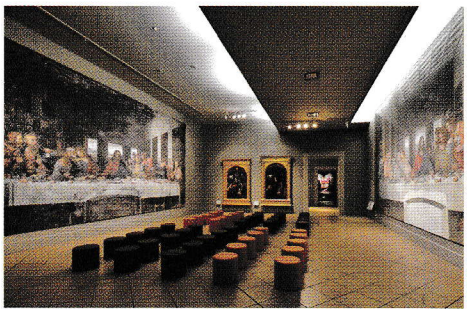
（飯田郷介）

正面玄関

システィーナ礼拝堂天井画および壁画／ミケランジェロ／ヴァティカン

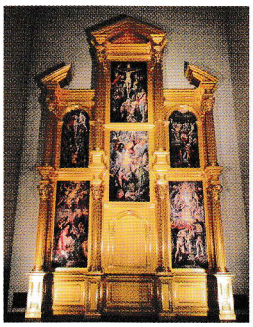


スクロヴェーニ礼拝堂壁画／ジョット／パトヴァ



「最後の晩餐」（修復前、修復後）／レオナルド・ダ・ヴィンチ／サンタ・マリーア・デッレ・グラーツィエ修道院 食堂

「真珠の耳飾りの少女（青いターバンの少女）」／フェルメール、ヤン／マウリッツハイス美術館



エル・グレコの祭壇衝立復元／エル・グレコ

7つの「ヒマワリ」展示室／ゴッホ、フィンセント・ファン

（写真提供：大塚国際美術館）

景観シンポジウム

aaca 30周年記念事業 ローカリティを魅せるしつらえ

ランドスケープアーキテクト
設計組織 PLACEMEDIA パートナー
日本建築美術工芸協会会員
宮城俊作

インバウンドツーリスト、つまり訪日外国人旅行者数の著しい増加は、これまで私たち日本人があたりまえのものとして、あまり深く考えることのなかった都市のローカルな個性の意味について、少しばかり異なる視点をもたらしてくれているように感じています。それは、「○○らしさ」などという紋切り型の定型句で表現されるようなものよりも、はるかにディープなところで私たちの暮らしとつながっているように思えるし、ましてや東京と地方の差異をことさら喧伝するような論調とも一線を画するものです。東京にだって、様々な街のローカリティは存在するのですから。

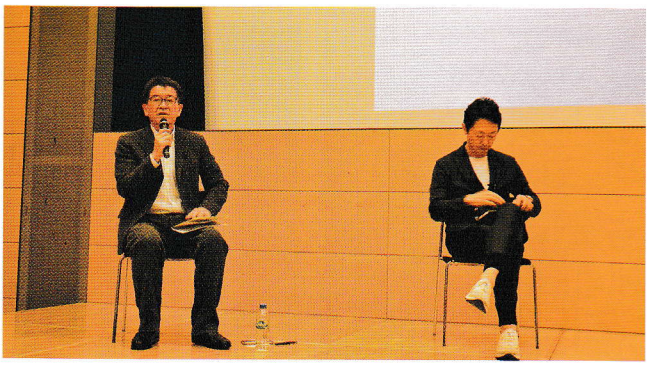
このシンポジウムでは、街と景観のありかたに、少しばかり新しい展開の予感をもたらしてくれている都市のローカリティの現在と未来について、異なる3つの分野で活躍されている方々をお招きして、それらに関するお考えやご経験、ご自身の関わり方について語っていただくとともに、参加される方々とそのコンセプトを共有する機会となることをめざしました。なお、ここでのテーマには、「デザイン」「アート」「建設」といった専門的な職能を連想させる語ではなく、あえて「しつらえ」という表現を用いています。これは、ローカリティが空間や景観に発現する状態は、そのスケールや場の立地において、私たちの日常的な暮らしやコミュニティでのアクティビティのシーンとしてとらえられるのではないかと考えたからです。また、「しつらえる」という行為には、他者に対する想いが込められものであって、誰でもがかかわることができる機会があることを示唆するので、このテーマにふさわしいものであったと思っています。

さて、実際のシンポジウムでは、3名の方にご登壇いただきました。ランドスケープアーキテクトの平賀達也さんは、東京都豊島区を中心とした活動の中で、それぞれの土地に潜在しているローカリティとしての自然資産というものにもう一度光をあてて、そこから現代都市に必要なものを引き出していくために必要な所作についてお話しいただきました。その一方において、国連が主導的にすすめているSDGsのグローバルな価値を対置することによって、この両者をどのように関係づけるかが、これからの取り組みの中で問われることになるだろうと述べておられました。

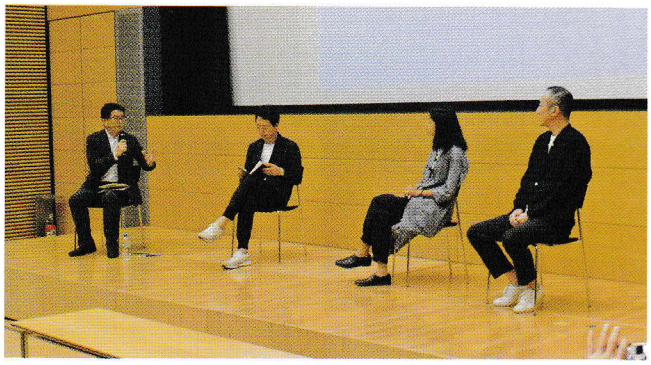
また、建築家の原田麻魚さんには、ご自身の作品である「道の駅ましこ」においてめざしたローカリティの空間表現について、建築造形のきっかけとなった地域の風景とそれをなりたたせてきた自然、工芸、人の相互作用についてお話しいただきました。特にその中では、空間の大きな枠組みを設定することと、空間をつくりあげる構造や素材をローカルな環境における物質循環に組み込むこと、この2点を通じて表現される場の魅力が、地域の持続可能な活動に大きなインセンティブとなっている点が印象的でした。

さらに、アートキュレーターの鷲田めるろさんには、「亀」と「瓢箪」のアナロジーとともに、金沢にある伝統的な町家を改修したご自身の仕事場での体験を通じて、パブリックな空間領域とプライベートな空間領域の狭間に立ち現れる領域がどのようにしつらえられるのかという視点から、地域コミュニティを介した様々なアクティビティの実例を紹介していただきました。ハイアートである美術作品とは全く異なるコンテクストと評価の視点から、ローカリティを魅せるしつらえの可能性が垣間見えたように思います。

後半のパネルディスカッションでは、3名のパネラーとモデレーターの間で、ローカリティの魅力をめぐって様々な意見交換がなされました。そして結局のところ、都市であれ地方であれ、建築であれランドスケープであれアートであれ、人がローカリティに魅せられるとき、そこにはその人のこと想う人がいるということを、いつも感じていられることが大切なのだと確認できたようでした。



モデレーターを務められた宮城俊作先生



ディスカッション風景

aaca 30 周年記念事業 景観シンポジウムに参加して

㈱大林組設計本部ランドスケープ課
日本建築美術工芸協会法人会員
岩井　洋

aaca 創設 30 周年の記念事業として「ローカリティを魅せるしつらえ－建築、ランドスケープ、アートの所作－」をテーマとした今回のシンポジウムは、ランドスケープの専門家として建築や土木などの分野の専門家と長年にわたり意見を交わしてこられた福井県立大学学長の進士五十八先生の幅広い知見に基づく話で始まりました。

「美し国の創り方」と題したお話の中で、「景観と風景」の違いや「時間の美」の大切さ、生物・社会・経済・文化の各観点からの多様性など、ローカリティを如何にして見出し、醸成させていくのが望ましいのか？考える際にヒントとなる様々な視点についてお話を伺うことができました。

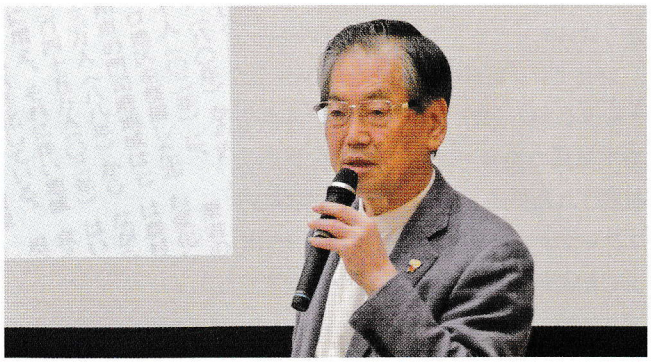
お話の後半で、どの地域にも何か特徴があるものですとのお話がありましたが、移動速度によって生じる得られる情報の質と量の違いを感じた経験を思い出し、埋もれがちな地域の魅力や課題を的確に把握するための姿勢や感性が重要だと再認識する機会を得たように思います。

進士先生のお話に続き後半のディスカッションでは、著名な建築家との協働も多く、大学でも長年教鞭を執られているランドスケープアーキテクトの宮城俊作先生を中心にランドスケープの平賀さん、建築家の原田さん、キュレーターの鷲田さんの活動をお聞きしながら、「ローカリティを魅せるしつらえ」について非常に興味深いお話を聞くことができたと思います。冒頭、まず印象に残ったのは宮城先生からお話にあった「しつらえ」という言葉についてでした。「場のセッティング」「誰かに対する思い」「誰もが関わる機会」という３つの意味合いが含まれているのではとの考えは、その後の登壇者の各プロジェクトにも、随所にその３つが丁寧に落とし込まれているように感じました。普段何気なく使用している「しつらえ」という言葉。わかっているつもりではありましたが、ローカリティを考える際に「しつらえ」の持つこの３つを、普段から意識して考えているか自問した次第です。

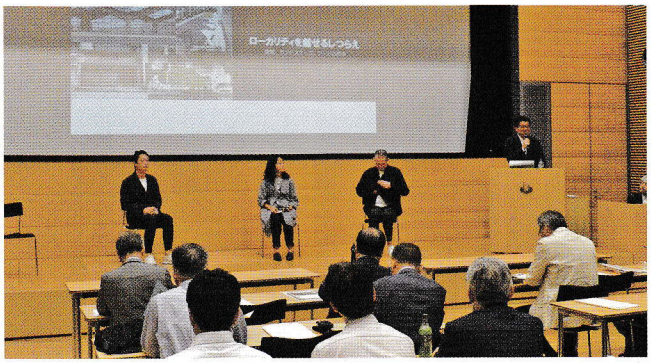
豊島区庁舎や南池袋公園などを手掛けられた平賀さんの話では、地球温暖化や気候変動、格差社会など社会を取り巻くグローバルな課題を意識しながらも、地域単位での活動や営みに目を向け、人々の日々の活動に根付いていくような場所づくりやデザインが大切であることを伝えて頂いたかと思います。原田さんからは数々の受賞をされた「道の駅　ましこ」の取り組みを紹介頂きました。竣工後に地元の方々から、この建築を通して自分たちのまちの美しさにあらためて気づいたとの言葉を頂いたという感動の話を伺いました。時間を掛け、地域の魅力を掘り下げ、地元の方々の声や知恵を拾いあげながら、「風景でつくり、風景をつくる」という思想の下、丁寧にこの地域に向き合おうとしたことが伝わってきました。

金沢 21 世紀美術館のキュレーターとして長年携わってこられた鷲田さんからは、集まっている人々の中で生まれるコミュニケーションが街の中でのアート的なものとも言えるのではないかとの非常に面白い視点を頂きました。

第一線で活躍するランドスケープアーキテクト、建築家、キュレーターを招き、魅力ある地域、まちづくりに向けたお話や活発な議論を聞き、あらためて確信したことはランドスケープ的な視点や感性はますます大切になり、建築、アートといった活動はもちろん、その他の分野でもその重要性、価値観は高まるのではないかということです。地域に支持され愛される、味わい深い風景や場所は、異なる文化を背景とした訪日外国人の感性にも、おそらくダイレクトに伝わることでしょう。今後急速に進む高齢化・成熟化社会、また、より一層の高度な科学技術の進歩など、ますます変化が読みづらい中にありながらも、誰かを思うことのできるしなやかな感性を持って、地域を見つめ醸成させていくことにより、シンポジウムの冒頭でお話のあった「年縞（ねんこう）」のような深みのある風景を築くことにつながるのかもしれません。



基調講演する福井県立大学学長の進士五十八氏



ディスカッション全景

推薦選考総評

街に飛び出す作品展
推薦選考委員長　南三一郎

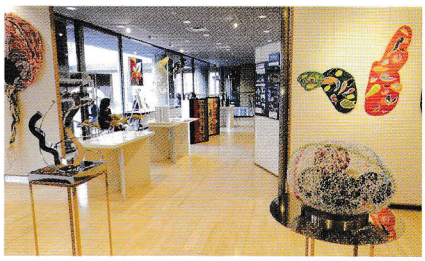
aacaは建築美術工芸を通して、街の景観づくりや文化環境の向上に寄与するという活動を行ってきました。今回、その一環として、具体的に街にアートを配していくという事業が催されるということは大変有意義なことです。本事業に賛同頂いた、出品作家の皆さんや各建物のオーナーの方々、スターツCAM（株）には謝意を申し上げたいと思います。

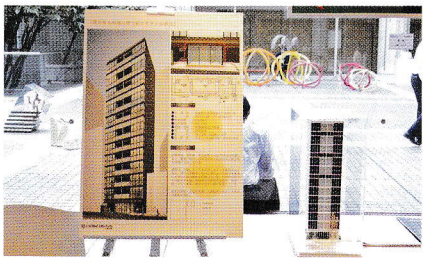
さて、今回は63点もの作品が寄せられたとともに、どの作品も力作で選定には熟慮しましたが、うち23点を選考委員の一致を持って選定しました。選から洩れた作家の方々には、自信作であったのにという不満もあるかと思いますが、今回作品の質に加えて、設置される環境・建物のデザインや選定した作品相互の協調を考慮し、素材感や色彩・フォルムなどを通じて、建物ごとのシークエンスも考えながらストーリーづくりを行い選定しています。

児童施設の入居する建物にはカラフルで躍動的なアートを配し、若い街には明るく包容力のある作品を選定しました。また、住宅地として成熟した街なかには質感に優れ落ち着いた表現の作品としました。

今後は設置した作品に日々接し、作家の放つメッセージと対話しながら、それぞれが豊かな環境へと醸成していくことを期待しています。

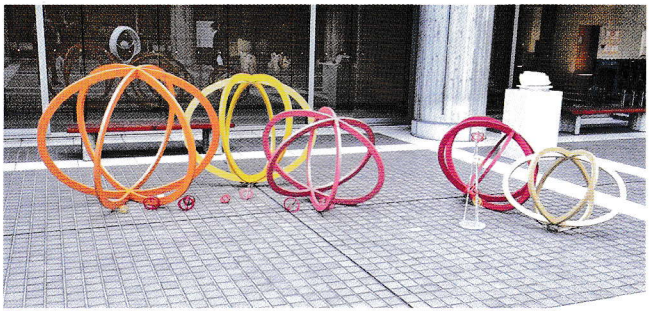
会場風景

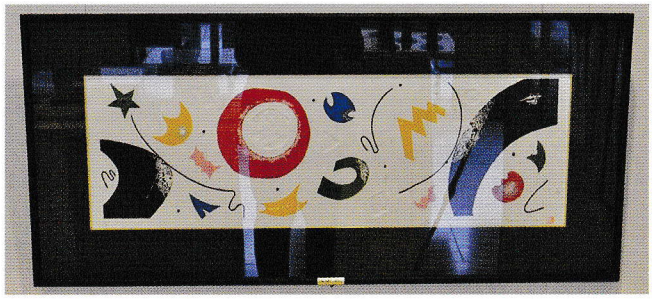

会場風景


物件模型

推薦作品

給田４丁目計画

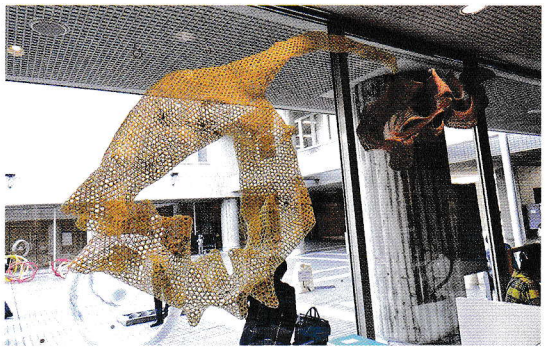

<外構>　加藤恵利　Bloom ー芽吹くー　金属（木製原寸マケット）


<エントランスホール廻り壁面>　高部多恵子　游　15－1　版画・紙

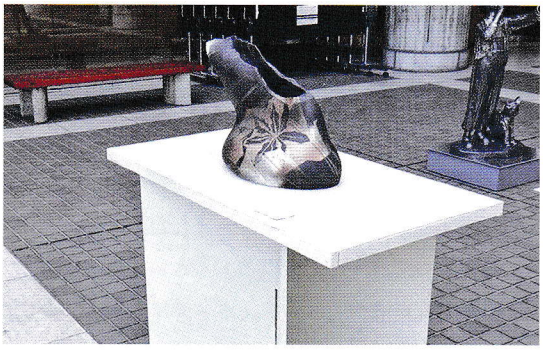
<エントランスホール廻り壁面>　中野恵美子
結び文字ーV　綿・麻（ジャガード織）

推薦作品

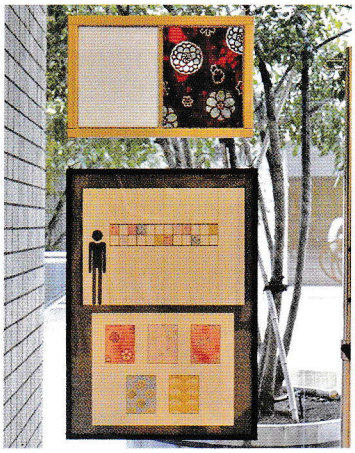
湯島３丁目計画



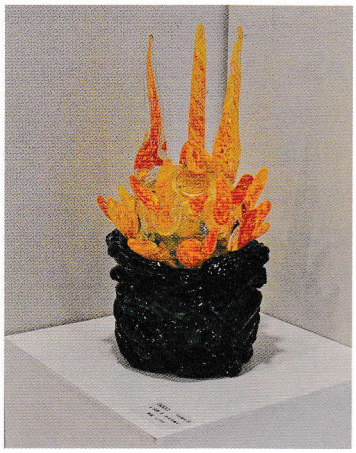
<風除室街側ガラス面>　神　芳子　Fennec　籐の皮



<風除室内オブジェ>　二木啓子　夜が明けたら　陶



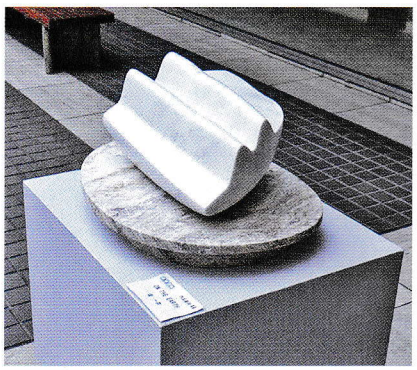
<風除室街側ガラス面>　上江州牧子
時の移ろい　ガラス・鉛材



<風除室内オブジェ>　鈴鹿しげみ
a　SUN　Ⅱ（ある太陽Ⅱ）　ガラス

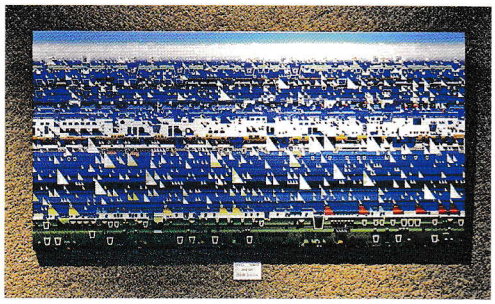
<エントランスホール>　品川未知子
誕生Ⅵ…巨樹　日本刺繍

おおたかの森 C68 街区（石村様）



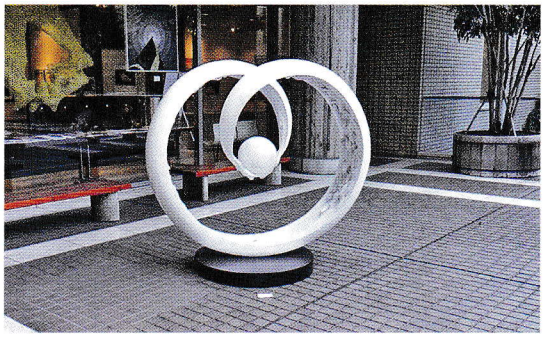
<外部店舗前>　堤　一彦　ON THE EARTH
マケドニア白大理石（マケット展示）

<エントランス壁面>　山崎輝子
Seeds ー慈雨をまって　皮革

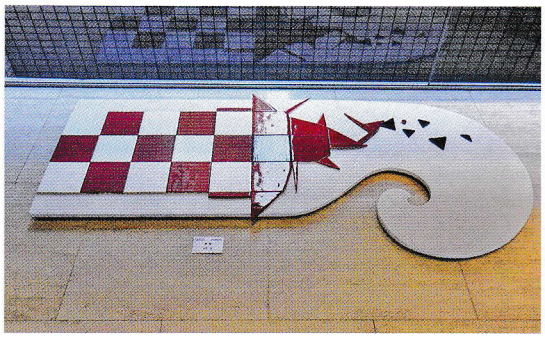


<エントランス壁面>　フィル・ユール　RACE DAY
デジタルペインティング on キャンバス

おおたかの森 C68 街区（河合様）

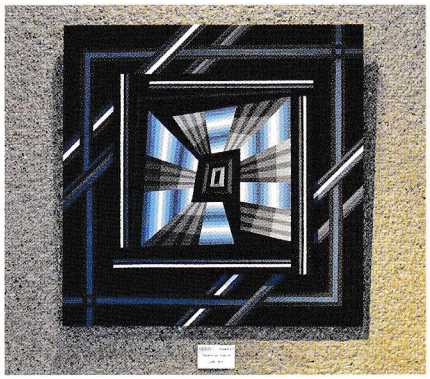


<外部店舗前>　池田嘉文　エンドレス ドリーム
強化プラスチック・鉄・ステンレス

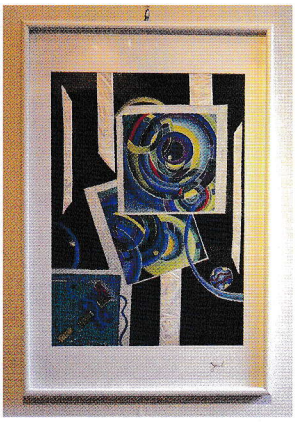


<ピロティ内部>　石井　春　無題　タイル・木

おおたかの森 C68 街区（河合様）



<エントランス内部>　山﨑和子　Square on Time A
染色（布）



<エントランス内部>　白野順子
サンサーラ・自然の魅惑　染織・絹

中町１丁目計画

<外構廻り>　安部大雅　起伏するかたち　御影石・木

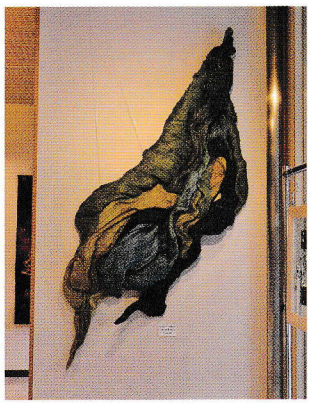
<風除室壁面>　井上勝江　想　6　越前和紙

<風除室壁面>　渡辺雅夫　COLLECTION A
ウォルナット・漆喰

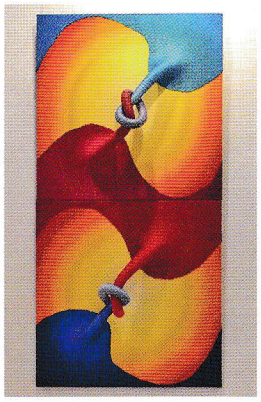
やつやエステート計画

<外構廻り>　野口真理　たねから土へ
陶土・粉漆・金属箔等

<エントランス廻り>　信ヶ原良和　森とオオタカ
ステンレス・鉄



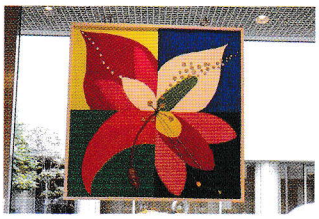
<エレベーターホール壁面>
五十嵐通代　明け方の夢 2017
絹糸・綿糸・ステンレス線



<エレベーターホール壁面>
小泉伸子　結（むすぶ）
木・紙ねんど・綿糸

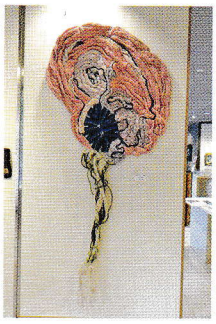
<エントランス廻り>　須齋尚子
浄一光の行方（キオラヒカリノユクエ）
陶土

応募作品



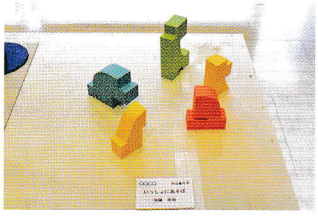
吉野ヨシ子（会員）　華・路（ハナ・ミチ）
木・ガラス・革・金箔・ゴム・アクリル

池田嘉文（会員）
AwAKen「太陽に願をかけて」　FRP



西田和恵（一般）考える花
綿糸・アクリルコート・テグス

神　まさ子（会員）　陰陽五行
木（炭）・金箔・錫

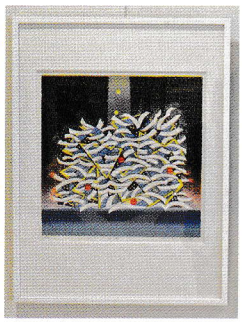


加藤恵利（会員）　いっしょにあそぼ
FRP（1/10 マケット）

高須ヨシ子（一般）
奏（カナデ）　刺繍

片岡雅子（会員）
ビッグフィンガー 1
七宝（銅板と七宝絵具）

片岡雅子（会員）
ビッグフィンガー 2
七宝（銅板と七宝絵具）

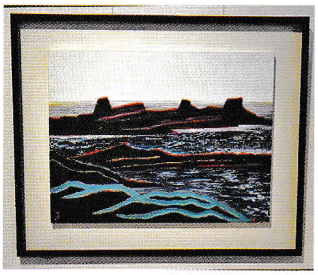


片岡眞幸（一般）　海の祭り
（NO.1）リトグラフ（版画）
紙・アルミ板・リトインク等

片岡眞幸（一般）　風そよぐ
（NO.2）リトグラフ（版画）
紙・アルミ板・リトインク等

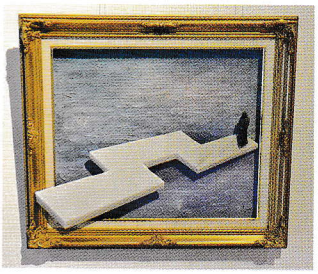
中嶋榮一郎（一般）　不忍蓮刈
漆喰画（岩絵具＋膠＋漆喰）

中嶋榮一郎（一般）　花嵐のあとで
日本画（岩絵具＋膠）



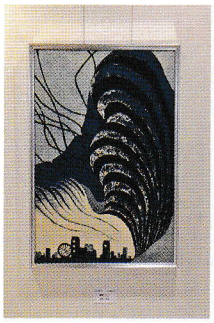
中嶋榮一郎（一般）　玄い岩礁
日本画（岩絵具＋膠）

中嶋榮一郎（一般）　茶室の窓
A window of the Tearoom Ⅰ、Ⅱ
日本画（岩絵具＋膠）



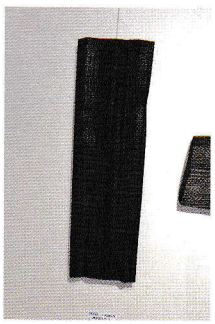
相澤久徳（一般）　時を渡る
石材・額・絵具

中嶋クミ（会員）箱庭～Tears of Amethyst　ガラス・木

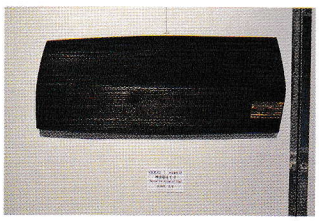


黒木明衣（一般）
旅情（Ⅱ）　染色・日本刺繍

ワクイ・フー（一般）
The Road to Hope Ⅴ
鉄板・漆焼付け・アルミニウム



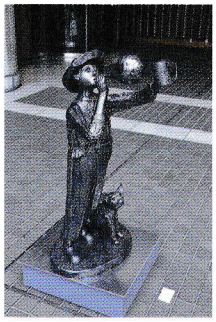
大河内久子（会員）
時を超えて－1"Beyond The Stream of Time　木材



大河内久子（会員）
時を超えて－2"Beyond The Stream of Time　木材

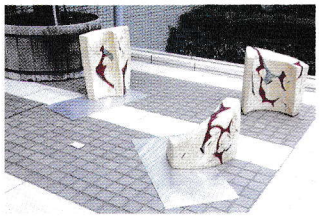
小野寺恵美（会員） CLAY WAVE
ー風紋ー 陶土・焼成

神 芳子（会員） 起動 籐



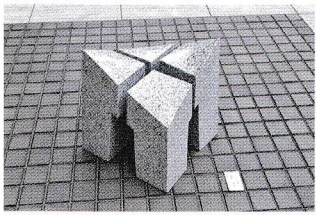
鈴木法明（会員）
風の悪戯 チタン

鈴木法明（会員）
やすらぎの詩（小）
チタン

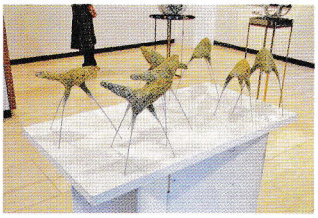


野口真理（会員） つちの中
陶土・粉漆・金属箔等

高橋幸子（一般） パリ・希望
キャンバス

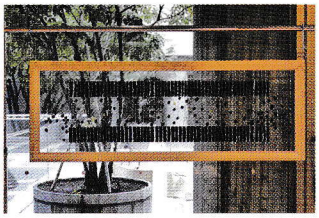


安部大雅（会員） 節理 ー 摂理
白御影石



岡本直枝（会員） 歩歩Ⅲ（ホホサン）
麻・羊毛・アルミ

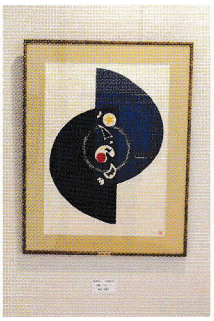
佐藤静子（会員） 星が生れる時
ウール・麻



平山健雄（会員） 光のインテグラル
ガラス・木枠付

堤 一彦（会員） Mather Earth
ゴールデン・トラバーティン

高部多恵子（会員）
ring 版画・紙

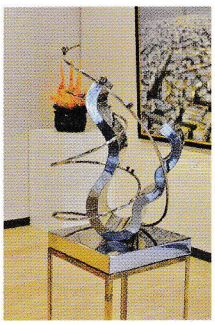


高部多恵子（会員）
光輪 18ー1 版画・紙

小原輝子（会員） 日時計
パネル展示

高久 茂（会員） 猫（スカーフ）
版画・木版多色

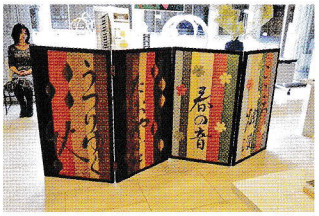
犬飼三千子（会員） merge
シナベニヤ・アクリル・ボルト



重田恵美子（一般）
MESSAGE FROM THE
SKY ーⅡ ステンレス

重田恵美子（一般）
TOMORROW シリーズより ー生きるー
ステンレス・銅

浜崎ベア（会員） 春爛漫
布



浜崎ベア（会員） 秋たおやかに
布

設立 30 周年記念事業実行委員会だより

実施予定記念事業（平成 31 年 1 月～ 3 月）

景観シンポジウム 「これからの都市景観のあり方を探る @GINZA」	陣内秀信、中島直人、三浦　展、 竹沢えり子、坂本弘之、 畑野　了、山本　実	2 月 20 日（水） 日大 CST ホール（駿河台）
第 195 回フォーラム 「AI 時代の手の仕事～これまでの手仕事とこれからの手仕事」	大橋正芳	3 月 7 日（水） サンゲツ品川ショールーム
記念講演会　（調査研究委員会） 「地域の文化芸術活動／今、宇都宮がおもしろい（仮）」	中川　武、藤原宏史、 小野寺優元	3 月 19 日（火） 糖業協会ホール（有楽町）

事務局だより

■新入会員・会員の異動　2018年10月～2018年12月（敬称略）

2016 年 9 月　個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	齋木慶一（彫刻家）、上江洲牧子（美術家）、小笠原伸行（造形家）、京谷友也（建築家）、渡邉竜一（建築家）、髙橋匡太（照明デザイナー）		
法人会員	㈱アトリエ・ジーアンドビー	代表取締役 伊藤　均 担当 迎田瑛麻	〒 141-0031 品川区西五反田 7-25-5 西五反田七丁目ビル 6 階 TEL.03-6417-0909
法人会員	㈱ノザワ 東京支店	支店長 藤井邦彦 担当 小坂井俊治	〒 104-0033　中央区新川 1-4-1 住友不動産六甲ビル TEL.03-5440-6711

《会員の異動》

法人会員	㈱松田平田設計	代表者変更	代表取締役社長　江本正和 （前任　中園正樹）
法人会員	㈱梓設計	担当者変更	常務取締役執行役員　和出 知明 （前任　櫻井康裕）
法人会員	㈱山下設計	担当者変更	常務執行役員　建築設計部門長 鷹箸寿昭　（前任　和田　直）

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

会報は、本年より新年号を皆様の許にお届けすることになりました。新年号では、岡本会長の新年のご挨拶に続き、各委員会委員長には、新年のご挨拶と各委員会のご紹介をお願いしました。各委員会の楽しい活動を知っていただき、委員会活動に一人でも多くの方に参加していただき、交流の輪を広げていただければと願っております。

また、会報では昨年より「法人会員の企業活動を訪ねる」というページを設け、会員のご紹介を始めました。

本号では、協会設立当時からの法人会員の大塚オーミ陶業株式会社をご紹介しました。大塚グループの発祥の地である徳島県鳴門市に開館した「大塚国際美術館」を取材しましたが、大塚オーミ陶業の特殊技術によってオリジナル作品と同じ大きさに複製・再現された古代壁画から西洋名画まで 1,000 余点が展示され、世界の名画を日本に居ながらにして楽しむことができる素晴らしい美術館でした。

会報は、会員皆様の貴重な活動の発表の場でもありますので、個人会員の皆様からの寄稿もお待ちしております。

aaca 2019.1 no.82

発行人　会長 岡本 賢
発　行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒 108-0014
東京都港区芝 5-26-20　建築会館 6 階
TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
URL　http：//www.aacajp.com
E－Mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　飯田郷介
会報担当副委員長　野口真理
会報編集委員　五十嵐通代　石田眞人　竹生田 正
田島一宏　中村弘子　松本治子
三上紀子　山崎和子　山崎輝子
山下治子　吉田 誠

編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション